

八八 廣田彦麿

雜誌「傳記」昭和十四年七月、八月、九月號は、廣澤參議暗殺關係の廣田彦麿の記事で賑はつた。彦麿のことは、曾て柳河歌人氏名録（柳河百家集）によつて知つたが、此書はたしか渡邊刀水氏に借覽したと記憶してゐる、其外には故學人姓名録と長崎古今學藝書畫博覽といふ書に、九州筑後の人山門郡瀬高村字八幡社人、勤王家。位の簡單な傳記があるのみで、また詠歌は「かざしの花」といふ野口正忠七十賀の歌集（明治二十六年刊）に二首出てゐる外は知らない。此歌は何れも立派なよみ口である。そこで例の生歿年月日調べをすると、幸に其後裔が分つたので聞合はせの結果、彦麿の孫に當る速生氏から回答を得、すなはち

彦麿は西原晁樹の國學門人なること

明治三年から六年まで、名を筑紫速雄と稱してゐたこと

天保元年一月十一日生れ、明治二十九年八月一日、六十七歳歿のこと

妻を鶴代といひ、國學を久留米の木室氏に就て學び、天保六年生れの、大正四年一月十六日に八十一歳を以て歿したること

などを知り得た、それは昭和二年のことであつた。

山本苗子なほは彦鷹に従學し、萩原頼平氏によれば「稚學楷棠」といふ手稿があり、それを彦鷹が校閲してゐるよし、明治名婦百首中に

甲府柳町の町年寄、山本金左衛門の妻にして、貞操を盡し子女の教育よく、文事に志厚くして歌文に巧みなり、年齢五十有餘なれども、勉強力は猶少年の時の如し、岩がねの歌は後漢の韓信をよめる近年の佳作なりとかや

と記して

一 岩がねの下くぐり來て大海に流れ出たる山川の水

の一首が載せられ、また玉籟集にも詠歌が収載されてある。萩原氏によれば明治二十二年七月十七日歿とのことである。